

カザフスタン ソ連時代の後遺症からの脱却

すが 須賀 つとむ 努

コラムニスト・アジアウオッチャー

日本人の中央アジアへの憧れは非常に強い。筆者も昔からシルクロードを旅する夢を何度も見てきた。今回ついに初めて中央アジアに足を踏み入れた。場所は資源大国と言われ、中央アジアで最も裕福と言われているカザフスタン。ソ連邦解体から20年以上を経て、どのような国になっているのか、興味津々で出掛けた。

ソ連時代の後遺症

カザフスタンの最大都市アルマトイ、その中心部を歩くと、ヨーロッパのどこかの都市に紛れ込んだような錯覚を覚える。それほどに緑に恵まれ、夏の暑い日差しを遮ってくれる。そして何よりも、その重厚な建物、これはソ連時代の1950-60年代に建てられたものだという。まだ行ったことはないが、モスクワなどロシアの都市と似ているのではないだろうか。

街並みがきれいなのは良い。だがソ連邦解体後、1991年に独立したこの国では、いまだにロシア語が主に通用していた。国民の70%がカザフ人であり、祖国の独立を待ち望んでいたのに、である。飛行機



写真1 アルマトイ旧市街地

内で知り合ったカザフ人は『恥ずかしい話だが12歳になる息子はカザフ語が全く話せない。アイデンティティを保つためにも

カザフ語を勉強するように言っているのだが』と声を潜める。因みにカザフのナショナルフラッグであるエア・アスターナ



写真2 中国系カザフ人の家で馬乳酒を頂く

の機内での彼と客室乗務員の会話もすべてロシア語であったのには本当に驚いた。

100年近くソ連邦の傘下であり、言語を奪われていた民族は、そう簡単に母国語を取り戻せず、それはまた簡単に意識を変えられないことに繋がっている。カザフでは政府の管理統制が行き届いており、公務員は国民を管理するもの、と言った風潮がいまだに続いている。実際我々も滞在中市内で2回もパスポートの提示を求められた。ただ一説によると、『不法滞在の中国人に間違われた』可能性も高い。警察官が小遣い稼ぎに不法滞在者を探し、わいろを受け取って見逃しているという話もある。

首都をアルマトイからアスタナに移したのも、古い体質の転換を図ったと言われているが、いまだに経済の中心はアルマトイであり、ソ連時代の古い考え方を色濃く残しているのもアルマトイだと言われている。尚カザフはイスラム教国であると言われているが、長いソ連時代に宗教色は極力薄められており、ラマダンや一日5回の礼拝などの習慣もあまり行われていないという印象を受けた。食事だけは豚肉を食べない、ハラール食品を食べる習慣が残って



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

撮影：佐渡多真子



いたが、これも若者の間では薄れつつあるように思えた。

脱資源を目指す

国土は日本の7倍もあるのに、人口は僅か1700万人のカザフスタン。石油や天然ガスを豊富に持ち、豊かな国との印象があるが、独立以来大統領の職にあるナザルバエフ氏は『脱資源』を掲げ、政策を打ち出している。資源だけに頼り、付加価値も付けずに輸出していたのでは国の将来が危ういと考えているようだ。

カザフの基本は農業と牧畜業であるが、ソ連時代のコルホーズ、ソホーズの多くは、独立後耕作などは行われずに放棄された土地となっていた。政府は中国の新疆などにいるカザフ人に帰国を呼び掛け、土地を超低利で貸し与えるほか、様々な優遇政策を施して、農業の継続を図っている。実際に国境近くの村を訪ねてみると、新疆から移住してきた農民たちが野菜や芋を作り、羊や牛を飼っていた。彼らは一様に『中国よりこちらの方がはるかに良い』と言っており、カザフ人移住者は年々増加している。新疆での少数民族への搾取の様子を垣間見る結果ともなった。

また大規模農地を外国法人を含めた企業に貸し出し、効率的な農業を展開するという政策も打ち出されている。日本の農機具メーカーも視察に訪れた、との話もあり、食料自給率の向上も目指して、推進して行くものと思われるが、地域ごとの利権も絡み、すぐに展開が図られるかには疑問がある。

一方工業に関しては、原油生産に絡んで、韓国企業が石油化学プラントを建設するという話もでてい

た。またトヨタが車の組み立てを開始、地元ではかなりの期待を持って迎えられていたが、狙いはロシアなどへの輸出であろう。南部のシムケントでは綿花栽培に合わせて、トルコ企業と組んで紡績業を始めるとの話もあった。ただ現時点では全てが施行の初期段階にあり、如何に実行に移すかは政府の手腕にかかっている。

ロシア寄りにかじを切る外交

カザフの外交は旧主国ロシアと隣の大国中国とのバランスをいかに取るかであったが、近年ははっきりとロシア寄りにかじを切った。中国と距離を置き、ロシア、ベラルーシと関税同盟を締結、中国物品の流入に高い関税をかけ、一方自国で生産される商品をロシアを通じてヨーロッパ側へ流す方針を打ち出している。これは前述の農業・工業推進政策の1つの方向性をも示している。

現実にアルマトイから350km離れた中国とカザフの国境、コルゴスに行ってみると、人の往来はあるものの、物資を輸送するトラックなどの行き来は予想外に少ない。そして以前計画されていた中国・カザフ自由貿易区には全く進展がなく、恐らくはそのまま放置されるであろう。一方250km西へ行ったキルギスとの国境、コウダイでは物資の輸送が活発に行われており、中国側との違いを見せていた。

緊迫するウクライナ、中東情勢はここ中央アジアの中心国、カザフにも大きな影響を与えていると思われる。逆に言えば、これからのカザフの動きはロシア、中央アジア及びトルコと中国の大きな摩擦を生み出すかもしれない。この辺りの動向は注目に値する。